

『人民日報』における中国側の抗日戦争記念日 言説の変容と特徴

PAN Yilei

本論の目的は中国の公定ナショナリズムを象徴する『人民日報』の言説空間において、ナショナルシンボルとしての戦争記念日、特に中国側が主張する抗日戦争記念日がいかに語られるのか、なぜ抗日戦争に関する記念日が複数に設定され、大々的に取り扱うのかを検討する。

抗日戦争記念日の背景から見れば、「目前、我国の抗戦に関する記念日は主に七七抗戦記念日、九三抗戦勝利記念日（中国人民抗日戦争勝利記念日）、九一八記念日和南京大虐殺記念日」¹という四つの記念日は戦時中の事件を記念するために設定されたことがわかった。

抗日戦争勝利 40 周年の 1985 年に戦後の日本首相の初の靖国神社公式参拝をし、同年の 9 月 18 日は北京で 1972 年日中国交以来の初めての反日デモがあった。中国の官制メディアの代表の一つである『人民日報』は抗日戦争勝利四十周年記念に関する報道を大々的に取り扱われて、日中国交以来の友好を報じ続ける立場が急に変わった。しかし、五年前、さらに十年前の『人民日報』は抗日戦争勝利の周年記念にこのような関心があることは全く示されなかった。ゆえに、本論は 1985 年から 2015 年にかけての『人民日報』の各抗日戦争記念日（七七抗戦記念日 7/7、抗日戦争勝利記念日 9/3、満洲事変記念日 9/18、南京事件記念日 12/13）の前後三日の記事を分析対象とする。また、論点に応じて、毎年 8 月 15 日前後三日の日本の終戦日に関する記事も視野に入れた。

本論は三つの問いを設定する。一つ目は、なぜ中国側の「抗日戦争」記念日を四つに設定し、各記念日は何を記念の中核（勝利もしくは恥辱）とするのか、四つの記念日は公定の記念日言説において、いかに位置づけるのか、ということである。

二つ目は、1990 年代半ばからの『人民日報』は日本の 8 月 15 日をいかに語り、以降の記念日言説に利用したのかということである。

三つ目は、中国の公定の記念日言説は現在と過去にいかなる差異があるのか、記念日言説の変容から、いかなる抗日戦争の戦争観が映し出されるのかという点である。

¹ 「我国有関抗戦的記念日有哪些」『人民日報』2014 年 7 月 7 日、第 4 面。

以上の問いを明らかにすることによって、中国側が四つの抗日戦争記念日を設定する理由、およびその言説の変容の一側面を明らかにした上で、抗日戦争記念日言説から映し出される中国の公定ナショナリズムの特徴を検討してきた。

「七七」記念日は記念日言説の先頭として、中国の公式的抗日戦争の歴史記述を主張する上で、当時の中国側の台湾への訴えを念頭に、当時の台湾に対する戦略を打ち出した。1990年代に入る台湾の社会背景が変わり、一方的な台湾への呼び掛けることの意味が無くなった。その後の「七七」の言説は抗日戦争記念の中の代表になった。

抗日戦争の勝利を象徴する「九三」は「中ソ友好同盟相互援助条約」の影響から生まれたものとして、記念日言説が重視し始めた 1985 年の当時の中ソ関係と、中国の抗日戦争歴史研究の限界によって、抗日戦争の勝利記念の一役とされた。他の抗日戦争記念日を補足説明することに、5 年や 10 年ごとの時点に言説が大きく展開し、抗日戦争歴史研究の成果を提示した。

「九一八」は 1985 年の時に国恥記念日として定義され、国民党の消極的なイメージを中心に語られた。抗日戦争歴史研究の成果として、1990 年代の曖昧な歴史記述は 2000 年代に入るからが整理できた。2005 年の戦後 60 年に迎え、世界範囲の第二次世界大戦史の重視と共に、世界反ファシズム戦争の発端に位置付け、中国の第二次世界大戦における地位を一層高めるための言説になった。その後の「九一八」の記念日言説は勝利や恥辱に関係なく、中国の国家利益のスローガンに応じて記念の中核が変わっている。

「一二一三」の言説は 1985 年の当初に西安事変記念日の背後に隠された。南京大虐殺に関する記憶が国民間に共有できる前に、南京市で行われる記念活動や建てられた記念館に着目した。1990 年代の中国の一方的な台湾の言説は効かなくなり、記念日言説における台湾の退場、さらに 1995 年からの中国の教育政策の要求に応じて、重視し始めた。2014 年に正式的に登場した。「一二一三」の記念日言説は中国の第二次世界大戦における役割や被害のイメージを強調する一方、集合的記憶の創造を目指した。

通時的な考察を通して、四つの記念日は抗日戦争中の出来事を記念するが、「抗日」に主眼を置かず、記念日言説を通して、国民の愛国心を導いた。中国が主催する抗日戦争歴史研究は記念日言説の歴史記述に裏付け、中国側の戦争認識を表している。そのため、抗日戦争記念日言説の変容は中国の抗日戦争史研究に制約されている。また、中国の抗日戦争記念日の言説から見れば、公定ナショナリズムは空間的、そして時間的にも限られたものとして想像されるものである。